

補助動詞「テシマウ」のAspectについて

On the Aspect of Japanese Auxiliary Verb “-te shimau”

内 山 潤

Jun UCHIYAMA

1. はじめに

日本語におけるAspectの意味は、「テ形+補助動詞」という形で表されるものが多い。テシマウもそうした形式の一つであり、完了の意味を表すとされている。しかし、テシマウは、高橋(1969)において、「[[期待外] 予期しなかったこと、よくないことが実現することをあらわす」という用法が指摘されて以降、単なるAspect形式ではなく、ムード的意味を併せ持つという見方が一般的である。

グループジャマシイ(1998)では、テシマウ形式の意味として、以下の2つを挙げている。

1. V-てしまう〈完了〉

動作の過程が完了することを表す。継続する動作を表す動詞の場合には「R-おわる」に近い意味になる。また、(中略)動詞の意味によっては、「ある状態に至った」という意味を表す。

2. V-てしまう〈感慨〉

文脈によって、残念、後悔など、いろいろな感慨をこめて使われる。「とりかえしがつかないことがあった」というニュアンスが加わることもある。

以上の通り、テシマウはAspectとムードの中間的な形式として研究されてきてお

り、主に2つの意味の関係について焦点が置かれてきた。多くは、完了の意味の方をテシマウ形式の基本的な意味としてとらえ、そこからどのように「残念・後悔」などのムード的意味が派生するかを考察している。寺村(1984)などでは〈完了〉が事態の起こる以前の状態には後戻りできないという含意を生じさせ、そこからマイナスの感情・評価が派生するものとしている。また、梁井(2009)では、通時的な観点から鎌倉期以降の文献調査を行ない、前接する動詞の種類が歴史的に拡張されていく経緯から、完了から感情・評価的意味が派生する過程をとらえている。

一方で、藤井(1992)、鈴木(1998)などでは、テシマウ形式の基本的な意味は、ムード的意味の方にあるとして、ムード的な意味を中心に分析を進めている。これらは全体から見ると少数派の見方ではあるが、テシマウ形式が完了を表す条件がかなり限定されていることもあり、ムード的意味の詳細な分析も有益なものである。

しかし、テシマウ形式がAspectとムードの関係から研究されてきたことで、純粹にAspectを表す場合のテシマウの意味については十分に研究されているとは言い難い。

特に日本語には、シオワルという完了を表す形式も存在しており、この形式との意味の違いについてもはっきりした結論は得られていない。そこで、本稿では、テシマウ形式が、純粋にアスペクトを表すと考えられる場合について考察を絞り、シオワルという形式と比較していくことで、テシマウ形式のアスペクトの意味を明らかにすることを目的とする。

2. 先行研究における完了アスペクトの成立条件

テシマウについての先行研究では、その多くが完了アスペクトの意味を何らかの形で認めている。また、そのほとんどが、完了アスペクトは全てのテシマウ形式の文に表れるものではなく、主に前接する動詞の種類による条件があることを主張している。

テシマウをアスペクトとして扱った最初の研究としては、金田一（1955）と考えてよさそう。この研究では、テシマウを動作相のアスペクトの終結態の一つとして分類している。終結態とは、「ある動作・作用が完全に行われる」と規定されている。動作相のアスペクトとは、「読んでしまう」「消えてしまう」などのテシマウを接続した形式全体が動作・作用であることを表しており、同じ動作相の終結態としては、シオワル・シオエル・シキルなどがあるとしている。

次に、この終結態をとり得る動詞の条件としては、「状態を表す動詞ではなくて、動作・作用を表す動詞でなければならない。」「その動作・作用はある時間の間継続するものでなければならない。」という2点を指摘し、継続動詞であることが必要であるとしている。また、瞬間動詞については、「その動作・作用がかりそめでなく本当に行われる」という意味の既現態という別の意味になるとされている。

これに対して、高橋（1969）では、テシマウの意味として〔終了〕〔実現〕〔期待外〕の3つを挙げている。このうち〔終了〕が「うごきがおわりまでおこなわれることをあらわす。」と規定されており、完了アスペクトに相当するものである。また成立条件としてはこの用法が実現に比べて非常に少ないとした上で、以下の3つを場合があるとしている。

(a) 主体または対象に変化を生じる結果動詞

(b) 進行性の継続動詞で、動きの量や位置が決まっている場合

(c) くりかえし動作が全部終わる場合

金田一（1955）が動詞の表す動作・作用の時間的長さによる条件を設定しているのに対し、高橋（1969）はむしろその動作・作用の完了後の結果に注目している。さらに、その使用条件が動詞そのものの性質に留まらず、(b)のように補語も加えた命題そのものが関わることを指摘しているのも重要である。また、瞬間動詞であっても、くりかえし動作を表す場合は完了アスペクトとなるとしている。

上記2つの研究によって、テシマウが完了アスペクトを表すための条件として、事態の成立一定に一定の時間を要する、事態の成立後に何らかの決まった結果状態が予測されるという2つの条件が指摘されている。

吉川（1973）および寺村（1984）においては、基本的に金田一の指摘した条件を踏襲しているが、杉本（1991）に至って両者を融合した規定がなされている。杉本（1991）では、「完結相の『てしまう』が接続するには、最低限、動詞に継続性が必要であることは確かである」という点は認めた上で「ひとまとまりの動作」という点が関与していることを指摘している。

(1) a. 花子は踊ってしまった。(実現相)

b. 花子は その踊りを 踊ってしまった。

(完結相) (杉本1991の例文)

の違いにおいて、両者とも継続性を持った動作であるが、a. がまとまりのない動作であるのに対して、b. は「何かの踊り」というまとまった動作になり、この違いが完結相と実現相の違いに反映していると考えている。また、このことから、「完結相に目的語やある種の修飾句が関与する」ことを指摘していることも重要な点である。

次に、ムード的意味の方をテシマウの基本的意味とした研究を見ていく。藤井 (1992) および鈴木 (1998) は共にテシマウをムードとして扱った研究である。しかし、両研究ともに、限定された条件のもとでは、テシマウが aspekto を表すということは認めている。テシマウをムードを表す形式として説明を試みた両研究においても、aspekto 的意味を表すとされる条件は、完了の aspekto 的意味がもっともはっきりと表されるものとして重要である。

まず、藤井 (1992) では、「(木を) きる」「(茶わんを) わる」「(えだを) おる」「(いもを) にる」「(湯を) わかす」などの、「対象に働きかけて、その対象に変化をもたらす動詞」を、「動作の実行と変化の実現の間には、時間的なずれがある。あるいは動作が実行されても目的の変化は達成されないこともある。」ことから、ポテンシャルな限界動詞としている。その上で「ポテンシャルな限界動詞では、それ自身で限界の達成をしめすことはできず、『してしまう』という形をとることによって、限界の達成を表現している。」としている。

(2) a. 芋を煮る。

b. 芋を煮てしまう。

つまり、(2)a. においては、必ずしも煮物の完成という意味は含意されず、b. において初

めて煮物が完成したことを示すことができるのである。

藤井では、さらに、『『してしまう』がつきそい文、とくに時間をあらわすつきそい文の述語としてあらわれる時、積極的にタクシス=aspekto 的意味の表現者となっている場合が多くみうけられる。』として、複文における用法についてもとりあげている。

(3) きれいな実がなったので、鳥たちが食べてしまう前に写真をとっておきました。

(3)のような文では、「食べる前に」では開始限界前を示すことになり、開始限界達成後終了限界達成前（食べ初めてから、実が全部なくなるまで）を示すためにはテシマウの仕様が必須である。

鈴木 (1998) は、テシマウの内在的意味（文脈によって変わることはない意味論レベルの意味）として「事態をひとまとまりにとらえ、その事態の実現を表わす」「話者が事態の望ましくないにとらえているか、または実現しにくいにとらえていることを前提とする」の2点を記述している。その上で、テシマウによって、終結の aspekto 的意味が読みとられるのは、動詞の内在的意味、内容の量や時間的な量を規定する修飾表現、語用論的な推論のいずれかにより事態の終結点が設定される場合であると主張している。

まず、内在的意味については動きの主体あるいは対象そのものに変化が生じることを表す動詞や、量や位置の決まっている動きを表す動詞の場合は、動詞そのものが終結点を持つ。

(4) 気をつけていないとお風呂の水があふれてしまうよ。 (鈴木1998の例文)

次に、内容の量や時間的な量を規定する修飾表現によって事態に終結点が設定される場合も終結の aspekto 的意味を持つとされている。

(5) 受験直前に本を1冊大急ぎで勉強してしまう。(鈴木1998の例文)

最後に、語用論的推論により事態が終結点を持つ場合を挙げている。

(6) 遊びに行く前に、先に勉強をしてしまおう。(鈴木1998の例文)

最後に、テシマウを限界点の達成を前景化するものとしている金水(2000)の研究を取り上げる。金水では、テシマウの時間的側面については、

シテシマウ(シテシマッタ)を時間制の面から見ると、スル(シタ)と基本的には変わりがない。例えば、「食べてしまった」で表される時間的意味のうち、「食べた」で表せない意味はないのである。

としており、テシマウの意味を時間的なものとしては捉えていない¹⁾。

(8) りんごを一度に五個食べてしまった。
≡りんごを一度に五個食べた。

(金水2000の例文)

(9) (子供が月見だんごをつまみ食いするのを陰で見ていて)

あ、食べちゃった。≡あ、食べた(どちらも、まだ食べ続けてよい)

(金水2000の例文)

(8)は終了限界、(9)は開始限界をとらえたものであるが、どちらも「食べた」で言い換えても時間的意味に変化はない。開始限界を表すか終了限界を表すかはどのように決まるのかという点については、金水(2000)は、限界動詞の場合には終了限界のみを表し、非限界動詞の場合には開始限界と終了限界の双方を表し得るとしている。

以上、先行研究において、テシマウが完了のアスペクトを表すための条件をどのように規定しているかについて見てきた。基本的な、動詞の条件としては、どの研究においても、

1) 動詞の表す事態が開始から終了までに時間を要する過程を持つか

2) 動詞の表す事態が、ある状態をもってそれ以上展開しないという内的限界を持つか

の2点が問題となっていることがわかる。さらに、藤井(1992)において指摘されるように、2)はさらに主体そのものが変化するいわゆる変化動詞と、主体が対象に働きかけを行ない変化をひき起こす主体動作客体変化動詞で異なることも考えられる。また、杉本(1992)や鈴木(1998)で指摘されているように、この2つの条件は、必ずしも動詞そのものの内的意味だけによって決まるものではなく、補語などの修飾要素も含めた命題全体で決まってくるものと考えられる。そこで、次に、動詞のより詳細な分類と、命題全体が持つ限界性について見ていく。

3. 動詞句のアスペクト素性について

森山(1984)では、「アスペクト現象を包括的かつ統一的に扱おうとするならば、動詞の意味を中核にしつつも、副詞や格成分の意味も含めて、出来事をあらゆるレベル全体の意味を考えるべきではないだろうか。」と主張し、動詞句レベルでのアスペクトの決まり方について考察している。また、アスペクトの意味を決める原理は、「進行中の意味の前提としての時間的な長さ(持続性)は捨象することはできない」として、主に過程持続の有無を問題にしている。森山(1984)が主として扱っているのは、テイルが動作の進行になるのか結果の状態になるのかという問題ではある。しかし、過程持続の有無は、テシマウが完了アスペクトになる条件の一つでもあるため、ここでは森山の議論を詳細に見ていく。

森山(1984)では、アスペクトを決定するのは出来事全体の意味であり、言語的には文

からテンスとモードをさしひいた残りの部分によって表されるとし、これをアスペクトプロポジション (AP) と呼んでいる。さらに、APの構成は、中心に動詞があり、次に格成分との関係で動詞の表す事象が具体化され、最後に副詞が付加されて全体の意味が決定されるという三段階の構成として見る。また、動詞の過程持続の有無とAP全体の過程持続の有無との関係については、本来的に過程持続の意味を持つものが、格成分や副詞によって過程持続を失うという「縮小の原則」によってまとめられるべきだと述べている。逆に過程持続をもたないものが持つようになる場合としては、「くりかえし」のみである。

また、動詞の過程持続の有無については、動作動詞／変化動詞という区分とは一対一では対応しない。動作動詞であっても「設ける、見つける、一瞥する、終える、見かける、設立する、目撃する」などは過程持続を持たないとされる。当然、変化動詞の「死ぬ、点く、消える」なども同様に過程持続を持たないことになる。

しかし、過程持続を持つ動詞だけを取り出すと、動作動詞か変化動詞かが問題になるとされる。変化動詞は、

- (9) 窓がゆっくり開いている。

(森山 1984の例文)

のように進行中で解釈することもできるが、中立的な条件では結果の状態として解釈される。これに対して、動作動詞は中立的な条件では動作の進行として解釈され、

- (10) 彼は門を壊しているが門はまだ壊れていない。

(森山 1984の例文)

などの文が成立するとしている。

格成分によって、縮小の原則が働く場合について、森山は、①非具体的な動きになる、②時間的一点化、③主体性欠如、の3点を挙げている。①は、

- (11) a. 潤は池の水を川に移している。

- b. 潤は池の管理権を市へ移している。

(森山 1984の例文)

において、b. では過程を取り出すことができず動作の進行とは解釈できなくなるということである。②は、

- (12) ドカンという音を聞いている。

(森山 1984の例文)

において、「ドカンという音」が非持続的であるため、「聞く」も過程持続を失なうというような現象を指す。③は、

- (13) a. 彼はいらなくなった小屋を焼いている。

- b. 彼は不注意で小屋を焼いている。

(森山 1984の例文)

において、主体性のあるa. においては動作の進行として解釈できるのに、主体性のないb. では結果の状態としか解釈できなくなる現象のことである。

副詞のAPへの関与については、以下のようによまとめている。まず、APにおいて動作進行を表しやすくなる、つまり過程持続を取り出しやすくするものとしては、「ゆっくり、ガタガタ」などの過程のマナーの副詞と「だんだん、徐々に」などの進展副詞を挙げている。さらに、「次々と、続々と」などの単純反復副詞と「毎日、いつも」などの習慣副詞については、本来過程持続のない動詞についても、過程持続を取り出すことができるとしている。逆に、過程持続を取り出せなくなる副詞成分としては、「一瞬、ガタンと」などの一時点的マナーの副詞、「きれいさっぱり、まっぴたつに」などの結末修飾副詞、数量詞による全体量規定、回数、「かつて、すでに」のような以前の成分を挙げている。

4. 完了アスペクトの意味について

ここで完了アスペクトの意味について、考

察を加える。金水（2000）では、テシマウ（テシマッタ）で表現される時間的意味のうち、スル（シタ）で表現できないものはないと指摘している。確かに工藤（1995）が指摘しているように日本語の基本的なアスペクトであるスル－シテイルの対立において、スル（シタ）はそれ自身が完成性を持つのであり、シテシマウの完了アスペクトはそれほど明確ではない。特にテンスが過去の場合、

- (14) a. 夕食を食べました。
 b. 夕食を食べてしまいました。
 c. 夕食を食べ終わりました。

のいずれにおいても発話時に「食べる」という事態が完了していることが示される。このため、一見時間的意味に違いはないように見える。a. とc. の違いとしては、「8時に」のような時を表す補語成分を加えた場合、c. では完了した時間を表すのに対して、a. では開始の時間を表すという違いが見られる。しかし、b. ではどちらともとることができるため、この点でもシタとシテイタの違いは不明確である。

しかし、テンスが非過去の場合、完了アスペクトが明確な場合もあると考えられる。

- (15) a. 帰ったらこの本を読もう。
 b. 帰ったらこの本を読んでしまおう。
 この場合、a. においては本を読了することは示されていないが、b. では読了することが明示される。同様に、依頼を表す文においても、
 (16) a. 飲んでください。
 b. 飲んでしまってください。

のような例でも、b. ではコップを空けることが指示されるなど、意向や依頼を表す文においては、テシマウ形式によって完了アスペクトが付け加えられていることは明らかである。つまり、この場合、テンス対立を持たないモダリティ形式で終わる文に完了の意味を付け加えるために、テシマウが使われるので

あり、これらはスルで置き換えることはできない。

- (17) 変な風評やネタバレなどを聞かされないうちに読んでしまった方がいい。
 (18) 本を読むのが苦手な子は、だからこそ教科書や課題図書は速く読んでしまいたいですね。

さらに、疑問文の場合にも、テシマウの完了アスペクトは比較的明確に現れる。

- (19) 飲んでしまいましたか。
 という疑問文に否定で答える場合、2つの答え方が考えられる。ひとつは、「いいえ、まだ飲んでいません」というもので、これは(19)を実現アスペクトとして見た場合の答え方である。これに対して「いいえ、まだ残っています」と答えることもこの場合は(19)を完了アスペクトとして捉えていることになる。

確言の文においても、

- (20) 時間ができた時にはほんの1時間位で1冊の本を読んでしまいます。

のように、スル形で置き換えることのできない完了アスペクトを表す文も存在する。しかし、(20)のように「一時間位で」のような時間成分と共起するのが普通で、全体的には、

- (21) 何時間も本を読もうとしても途中で飽きて来て他の本を読んでしまいます。
 のような完了アスペクトを表さない文の方が圧倒的に多い。

以上の観察から、次のようなことが考えられる。まず、テシマウによって完了アスペクトがはっきり表れるのは、意向、依頼、当為などのモダリティ形式を持つ文である。しかし、確言の文においても、条件によっては完了アスペクトが見られる。また、テンスが過去の場合も、

- (22) a. 今日はレポートを書いてしまおう。
 b. 昨日レポートを書いてしまった。
 という対応を考えると、シタの形との対比に

おいて見えにくくなっているだけで、やはり完了 aspekto を表していると考えることができる。つまり、b. において、「書いた」の形ではレポートの完成は必ずしも含意されないが、「書いてしまった」では必ず完成が含意されるという意味において、やはり完了 aspekto を持つと考える。

5. 動詞句の種類と完了 aspekto の関係

ここでは、動詞句の種類と aspekto の関係について見ていく。森山 (1984) でも認められている通り、動詞句の aspekto の性質を担うのはあくまで動詞である。そこで、まずは動詞の種類別にテシマウが完了 aspekto を取り得るかについて見ていき、さらに分類ごとに補語成分や副詞との関連を見ていく。

工藤 (1995) では、aspekto の観点から、動詞の全体的分類を行なっている。動詞は、まず、外的運動動詞、内的情態動詞、静態動詞の3つに分類される。本研究では、この内、外的運動動詞を分析の対象とし、内的情態動詞や静態動詞は紙幅の関係上扱わないことにする。外的運動動詞はその aspekto の性質から、A1. 主体動作・客体変化動詞、A2. 主体変化動詞、A3. 主体動作動詞の3つに下位分類され、さらに意味的な性質によって詳細に下位分類されている。

テシマウが完了 aspekto を持つ最低条件としては、2. で挙げた通り、過程持続の有無と内的限界性の有無が考えられる。工藤 (1995) の分類は、動作動詞か変化動詞かという観点から分類されており、内的限界性の有無については分類に対応している。しかし、過程持続の有無については特に考慮されておらず、一つのカテゴリの中に過程持続のあるものとなないものが混在している場合も見受けられる。そこで、単一動作についての過程持続の有無については、森山 (1986) のシ

ハジメルが言えるかどうかという基準で判定を行うこととし、分類ごとに必要に応じて言及していく。

まず、主体動作・客体変化動詞について考える。これらは他動詞で、内的限界動詞である。客体変化の成立という内的限界点を持ち、① 客体の状態変化・位置変化をひきおこす動詞と、② 所有関係の変化をひきおこす動詞に下位分類される。この内、②は「あげる、あずける、かう」など単一の動作では過程持続を持たないものである。一方①は、「殺す」のような過程持続を持たないものと、「あたためる、かたづける、」のような過程持続を持つものがある。①のうち、過程持続を持つものについては、完了 aspekto を持つための2つの条件を満たす。

(23) 春から気持ちいい新生活を迎えるためにも、3月中にいらぬものを思い切って片付けてしまおう。

(24) 休みの間に調子の悪いパソコンを直してしまおう。

これらの動詞は、完了 aspekto を持つことがわかる。①の多くが、「片付ける⇔片付く」のように、対応する自動詞を持つ。他動詞の場合は動作に焦点が当てられやすく、自動詞では結果に焦点が当てられやすい点は多くの研究で示唆されてきたことである。藤井 (1992) においては、「動作の実行と変化の実現の間には、時間的なずれがある」とされ、変化の実現の完了を表すためにテシマウが完了 aspekto となることが指摘されていた。(23) や (24) において、「片付けよう」「直そう」と言った場合には主に開始限界が示唆されるのに比べて完了がはっきり表される。

次に、主体変化動詞である。これらは①主体変化・主体動作動詞 (再帰動詞)、②人の意志的な変化動詞 (自動詞)、③ものの無意識的な (状態・位置) 変化動詞に下位分類さ

れ、いずれも変化の完了という限界点をもつ内的限界動詞である。この内、①は「着る、着替える、はく」などの動詞で、「着替え始める」などと言えることから過程持続を持っている。③は、「あたたまる、たおれる」のように過程持続を持つものと、「きえる、しぬ」のように過程持続を持たないものがある。②については、一回の動作で過程持続を持つのは「まわる、ちかづく、はなれる」のような位置変化を表す動詞の一部のみである。

①は限界動詞で過程持続を持つため、

(25) 時間があまりないので、さっさと着替えてしまおう。

のようにテシマウで完了アスペクトを取ることができる。スル形の「着替えよう」と比べた場合、スル形では着替えを開始することに焦点が置かれているのに対して、テシマウの形では着替えの完了までを含意している。

②のうち、過程持続を持つ「まわる、ちかづく、はなれる」については、

(26) 今日中にこの地区の客先を全部回ってしまおう。

のように「まわる」は完了アスペクトを持つことができるが、「ちかづく、はなれる」は完了アスペクトにならない。これらの動詞は「回っている、近付いている、離れている」でいずれも動作の進行を表すことも可能であり、動作動詞に近い性質を持つと考えられる。「まわる」については、集合動作を表す動詞であるため、完了アスペクトを持ちやすいと考えられる。

③には「あたたまる、かたづく、かたまる、とける」のように過程持続を持つものが多く含まれる。しかし、これらは、例えば

(27) 氷が溶けてしまう。

において、完全に溶け切ってしまうのか、溶けはじめるのかが明確でないように、完了アスペクトは表示しにくいと考えられる。ま

た、シハジメルは言えるがシオワルとは言えず、完了アスペクトを表示するためには、「溶けきった」や「完全に固まった」のような他の言語形式を用いるのが普通である。

最後の主体動作動詞は、全て非限界動詞で、6つに下位分類されている。主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞は全て内的限界動詞であり、過程持続の有無が完了アスペクトの有無を決める上で重要な基準になっていた。これに対し、主体動作動詞は全て過程持続を持つことができるかどうかで完了アスペクトの有無を決定付けると考えられる。

①主体動作・客体動き動詞は、他動詞で「うごかす、ふる、とばす」などが含まれる。しかし、ヲ格の補語をつけても限界を示すことはできず、完了アスペクトにはならない。

(28) 思わず、お手伝いするね、と椅子や荷物を動かしてしまいます。

のように開始限界の表現となる。また、シオワルについても、「動かし終わる、振り終わる」のような形ではほとんど使われない。

②主体動作・客体接触動詞については、「いじる、うつ、おす」などの本来の接触動詞から「たべる、のむ、すう」飲食に関わる動詞、「あう、ほうもんする、まつ、みおくる」などの対人接触に関する動詞が含まれている。「いじる、うつ、おす」などの動詞は、全て過程持続を持つが、テシマウの形では開始限界を越えることを表す。このうち、補語によって動詞句に内的限界を設定できるのは、「たべる、のむ、すう」などの飲食に関わる動詞である。これらは、テシマウで完了アスペクトを持つことができる。

(28) すこしお客が減ったので、今のうちにご飯を食べてしまおう。

③人の認識活動・言語活動・表現活動の動詞については、まず、認識活動の動詞とし

て、「きく、みる、しらべる」、言語活動の動詞としては「いう、かく、こたえる」、表現活動の動詞としては、「うたう、おどる、ひく、まう」などがある。これらは、いずれも過程持続を持ち、補語によって限界を付け加えることができる。テシマウによる完了アスペクトも可能である。

(29) 週末は時間があるので、この前買った10枚組のボックスセットを聞いてしまおう。

(30) 院試の勉強が本気で煮詰まる前に、教職のレポートを書いてしまおう。

(31) ちゃんと予定の3時30分までには全ての曲を歌ってしまおう。

これらは全て、シオワルの形でも完了アスペクトを表すことができる。

④人の意志的動作動詞、⑤人の長期的動作動詞、⑥ものの非意志的な動き(現象)動詞については、ほとんど補語成分によって内的限界を設定することはできず、テシマウも完了アスペクトは取りにくい。わずかに、④のうち移動動作を表す動詞「あるく、はしる、およぐ」などについては、距離や時間、到達点などを表す補語成分によって動詞句に内的限界性を持たせることができ、

(32) 今のうちに駅まで歩いてしまおう。
のように完了アスペクトを持つことが可能である。

以上、工藤(1995)の分類に従ってテシマウが完了アスペクトを取るかどうかについて見てきた。おおむね、主体動作・客体変化動詞については過程持続の有無が問題になり、主体動作動詞については動詞句レベルで内的限界性を持たせることができるかどうか問題となるなど、過程持続を持ち内的限界性を持つことが完了アスペクトを持つための条件であることは妥当であると言える。しかし、主体変化動詞については、いわゆる再帰動

詞を除き、完了アスペクトにはなりにくいことが観察された。以下、この点について考察を加える。

これら、人の意志的な変化動詞やものの無意志的な変化動詞については、全てではないにしろ、「～始まる」に接続するものがあり、過程持続を持つものが存在する。

(33) やっと西陽が隠れ始めた。

(34) 殆どの実が赤く熟す前に褐色の斑点ができて、次第に腐りはじめました。

これらの動詞は、過程持続を持ち、内的限界性も持つが、テイル形では結果継続となるのが普通であることは多くの研究で示唆されてきたことである。また、森山(1984)においては、「ゆっくり、ガタガタ」などの過程のマナーの副詞と「だんだん、徐々に」が接続する場合、過程持続を取り出しやすくなり、テイル形においても動作進行を表すことができるようになることとされている。しかし、テシマウにおいては、これらが接続した場合も完了アスペクトを表すとは言いがたい。また、これらの動詞はシオワルの形も接続することがない。シオワルにも接続しないことから、この種の動詞の文法的性質によって完了のアスペクトと共存しにくいということが考えられる。過程持続を持ちながらも、テイル形で一義的に結果継続を表すという性質とも深く関わっているものと考えられるが、この点については更なる検討が必要である。

最後に、テシマウとシオワルの完了アスペクトの違いについて考えてみる。テシマウで完了アスペクトを表すことができる場合が多くで、シオワルによっても完了アスペクトを表すことができる。両者にはっきりと違いが見られるのは、「時間+に」の形で時間を表す補語成分がついた場合である。

(35) 8時に夕食を食べ終わりました。

(36) 8時に夕食を食べてしまいました。

(35)において、8時は夕食が終了した時間を一意に表すことができるが、(36)においては必ずしも終了した時間とは限らない。ここから、シオワルの形が時間的には動作の終了時の一点を表すのに対して、テシマウはその完結までを含んだ動作全体をひとまとめでしてその完結を表すという違いがあると考えられる。

また、以下の2つの文を比べた場合には、次のように終わらせる意思についてのニュアンスの違いも感じられる。

(37) 昨日、レポートを書き終わりました。

(38) 昨日、レポートを書いてしまいました。

(37)については、特に昨日のうちに終了させるという積極的な意思は感じられない。むしろ、通常通りに書き進めていった結果として、「昨日、終わった」というような意味である。しかし、(38)については積極的に昨日のうちに終了させるという意思が感じられる。このため、意向形に接続する場合は、「書き終わろう」よりも「書いてしまおう」の方が自然に感じられる。こうした性質は、テシマウが「してしまおう」という形で意向形に接続したり、「てしまってください」の形で依頼の形をとったりできるのに対して、シオワルの方はそれが難しいという点にもつながっていると考えられる。

6. 結論

以上、動詞のアスペクト的性質の分類に基づいて、テシマウが完了アスペクトとなるかどうかについて考察してきた。その結果、テシマウが完了アスペクトを取る条件としては、

- 1) 動詞が過程持続を持つかどうか
- 2) 動詞が内的限界性を持つかどうか

の2点であり、結果として主体動作・客体変化動詞については過程持続の有無が、主体動作動詞については動詞句レベルで内的限界性を持たせることができるかどうかの問題とな

る。また、テシマウとシオワルのアスペクトの違いとしては、

- 1) 時間的にシオワルが完了の一点を指すのに対し、テシマウは完結まで含んだ動作全体をひとまとまりとして、その成立を指す
 - 2) シオワルは完了の意思とは共存しにくいですが、テシマウは共存できる
- の2点を指摘した。

しかし、変化動詞についての問題や、いわゆる実現相との関係など検討の及ばなかった部分も多い。今後の課題としたい。

注

- 1) ただし「作っている」が進行を表し得るのに対して、「作ってしまっている」を進行と見ることが難しいことは指摘している。

参考文献

- 金水敏 (2000) 「時の表現」金水敏・工藤真由美・沼田善子 (著) 『日本語の文法2時・否定と取り立て』岩波書店
- 金水敏 (2004) 「文脈結果情態に基づく日本語動詞の意味記述」影山太郎・岸本秀樹 (編) 『柴谷方良教授退官記念論文集 日本語の分析と言語類型』くろしお出版
- 金田一春彦 (1950) 「国語動詞の一分類」金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収
- 金田一春彦 (1955) 「日本語のテンストとアスペクト」金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房 所収
- 工藤真由美 (1995) 『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房
- グループ・ジャマシイ (1998) 『日本語文型辞典』くろしお出版
- 杉本武 (1991) 『『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ』『九州工業大学情報工学部紀要』4
- 鈴木智美 (1998) 『『～てしまう』の意味』『日本語教育』97号
- 高橋太郎 (1969) 「すがたともくろみ」金田一春彦

補助動詞「テシマウ」のAspectについて (内山 潤)

- (編) (1976) 『日本語動詞のAspect』 むぎ書房 所収
- 寺村秀夫 (1984) 『日本語のシンタクスと意味 II』 くろしお出版
- 藤井由美 (1992) 「『てしまう』の意味」 言語学研究会 (編) 『ことばの科学5』 むぎ書房
- 森山卓郎 (1984) 「Aspectの意味の決まり方について」 『日本語学』 3:12 明治書院
- 森山卓郎 (1986) 「日本語Aspectの時定項分析」 『論集日本語研究 (一) 現代編』 所収むぎ書房
- 守屋三千代 (1994) 「『シテシマウ』の記述に関する一考察」 『早稲田大学日本語研究教育センター紀要6』 早稲田大学
- 梁井久江 (2009) 「テシマウ相当形式の意味機能拡張」 『日本語の研究5 (1)』 日本語学会
- 吉川武時 (1973) 「現代日本語動詞のAspectの研究」 金田一春彦 (編) (1976) 『日本語動詞のAspect』 むぎ書房所収